上代におけるアリの接頭辞的用法について

畠山　真一

1　はじめに

日本語のアリは、上代から現代まで継続的に存在動詞として君臨しており、リやタリといったいわゆる継続・完了を表現するとされる助動詞を構成する資源として機能している（リは、「動詞の連用形＋ｉ＋アリ」から、タリは「動詞のテ形＋アリ」から派生したと考えられている）。現代日本語においても、主語指向のアスペクト形式であるテイル形に対応する形として目的語指向のアスペクト形式としてテアル形が存在している。

このように、上代から現代まで日本語のアスペクト体系の中で、動詞に下接するアリは、重要な役割を果たしてきた。

一方、上代に集中して出現するアスペクト形式として、動詞に上接するアリが観察される。次の(1)は、万葉集における「動詞に上接するアリ」を例示したものである。（本論文における用例はすべて『新編日本古典文学全集 万葉集（1）～（4）』から採られている）

(1)　愛（は）しきかも　皇子の尊（みこと）のあり通ひ　見しし活（いく）道（ぢ）の　道は荒れにけり（479）

(1)の傍線部の「あり通ひ」は、「通ふ」にアリが上接したもので、「安里我欲比」が原文であり、「ありがよひ」と訓読される。ここに見られる連濁現象は、アリと「通ふ」が緊密に結びつき一語化していることを示しているとされ、アリが接頭辞として機能していることを示唆しているとされている（澤瀉他 1967; Whitman, 2010: p.145）。さらに、この種のアリ（動詞に上接するアリ）を接頭辞して分析する根拠としては、アリと本動詞の間に介入する助詞（係助詞、副助詞）および副詞が観察されないという点もあげることができる。

また、意味・用法の点から言えば、本例における「あ

り通ひ見しし」は、「よく・習慣的に通ってご覧になった」という意味で使用されており、アリは習慣相（habitual）を示す接頭辞として機能していると分析されている。

ここまで述べてきたように、動詞に上接するアリは、未完了（継続、繰り返し、習慣）といったアスペクチュアルな意味・文法的機能を担う接頭辞として分析されてきた（澤瀉他 1967）。

この分析自体には問題は認められないが、上代盛んに用いられた文法形式である動詞のリ形（一般に存続・完了を示すとされる助動詞リが動詞についた形）とどのような違いがあるかという疑問が直ちに生ずる。実際、先に述べたように、動詞のリ形は、「動詞の連用形＋ｉ＋アリ」がつづまってできたと分析できるため、ここまで述べてきた接頭辞的なアリ（以後、接頭辞的アリとする）との差異が問題になる。

本研究は、万葉集における動詞のリ形と接頭辞的アリの文法機能を比較・分析し、次のような観察を提示する。

(2) a. リ形にない「習慣相・多回性」という用法を持つ。

b. リ形が接続しない動詞にアリが独占的に接続するケースが観察される（相補的分布をなしているように見える）。

c. リ形と接頭辞的アリは、「結果状態維持」用法を共通して持つ。

本研究の構成は次のとおり。次節において、万葉集における接頭辞的アリの用法を分析する。最後に3節において、残された課題について述べる。

2 接頭辞的アリの意味・用法

万葉集に接頭辞的アリは、39例観察される。アリが上接する動詞で最も多いのは、「通ふ」の18例で、ほぼ半数を占める。続いて「待つ」（8例）、「渡る」（3例）、「（た）もとほる（廻る）」（3例）、「立つ」（2例）、「慰む」（2例）と続く。

本節では、「通ふ」、「待つ」、「立つ」という動詞にフォーカスして、接頭辞的アリの文法機能を分析していく。

まず、最も用例数の多いアリと「通ふ」が連結さ

れた例を見てみよう。

(3) a. 大君の　遠の朝廷と　あり通ふ　島門を
見れば　神代し思ほゆ（304）

b. やすみしし　我が大君の　神ながら　高
知らせる　印南野の　大海の原の　荒栲
の藤井の浦に　鮪釣ると　海人舟騒き塩
焼くと　人ぞさはにある　浦をよみ　う
べも釣はす　浜をよみ　うべも塩焼く
あり通ひ　見さくも著し　清き白浜（938）

c. 垂姫に　藤波咲て　浜清く　白波騒き
しくしくに　恋はまされど　今日のみに
飽き足らめやも　かくしこそ　いや年の
はに　春花の　茂き盛りに　秋の葉の
もみたむ時に　あり通ひ　見つつ偲しの
はめ　この布勢の海を（4187）

(3a)の「あり通ふ」は、工藤（1995）の言う多回性を表現していると解釈されている。すなわち、「数多くの官人が通っている島門」と解釈されている。(3b)のアリは、多回性というよりは反復相を表現していると解釈され、「あり通ひ」は「しばしば通って」を意味すると考えられている。最後に(3c)も同様に反復相を表現する機能をアリが担っていると考えられ、「いや年のはに　春花の　茂き盛りに　秋の葉のもみたむ時に　あり通ひ」は、「毎年春の花が咲き誇っているとき、そして秋の葉が紅葉するときに、しばしば通って」と解釈されている。

ここで、現代語に目を転じて「通う」のシテイル形について考えてみよう。

現代日本語においてシテイル形の中核的な用法は動作の進行・継続もしくは主体変化結果の残存である。例えば、動作を表現する動詞である「飲む」のシテイル形「飲んでいる」は、「飲むという動作が開始され、終結しない」という状況を描写する。一方、主体変化を表現する動詞、例えば、「割れる」のシテイル形「割れている」は、「割れるという変化が発生したあとのその結果状況」を描写する。

しかし、現代日本語の「通う」のシテイル形は、動作の進行も主体変化結果の残存も示さない。次の例を見てみよう。

(4) a. 私は、専門学校に通っています。

b. 多くの高齢者が病院に通っています。

(4a)は、反復相を表現し、(4b)は多回性を表現しており、上代の「あり通ふ」と同じ状況が観察される。

加えて、「通う」のシテイル形が動作進行の読みを持ちにくいことを指摘できる。金水（2000）が述べるように、動作進行を表現するテイル形は「～最中である」というフレームに入れることができるが、「通う」のシテイル形はこのフレームに入りにくく、「通っている」が動作進行を表現しにくいことを示している。次の例を見てみよう。

(5) ??病院に通っている最中だ。

このように、「あり通ふ」と「通っている」は、まったく同じ様相を示すのである。

これは、上代語の「通ふ」、現代日本語の「通う」がともに語彙的意味として「多回性・反復性」を組み込んでいるからと思われる。

実際、上代の「通ふ」の語彙的な意味は、現代日本語と同じく、「行ったり来たりを繰り返す」であり、「歩む」「飛ぶ」といった移動動作様態を表現する動詞と異なり、語彙的意味事態に多回性・反復性が組み込まれている。次の例を見てみよう。

(6) 春日野の　山辺（やまへ）の道を　恐りなく　通ひし君が見えぬころかも（518）

(6)の「見えぬころかも」は「いらっしゃらなくなった最近である」と解釈できるため、これと対比的に、「通ひし君」は、「繰り返し来て去っていっていた」と解釈される。この点で、現代日本語の「通っている」も全同なのである。

このように考えると、接頭辞的アリは、このような反復性・多回性を前景化する役割を果たしていたと思われる。

では、接辞的アリとは逆に動詞にアリが承接することで形成された、いわゆる継続・完了を表す助動詞リ（本研究ではリ形とする）に関しては、どのような状況が観察できるだろうか。

万葉集には、「通ふ」が84例観察でき、否定、テンス（過去）、使役を表す助動詞が承接した例はあるものの（43例）、「通ふ」のリ形は観察できなかった。このデータは、リ形によっては「通ふ」の持つ多回性・反復性を前景化することができないことを意味する。

実際、万葉集におけるリ形は５６６例観察できるが、「多回性・反復性」を示すと解釈できる例は存在せず、接頭辞的アリが、このギャップを埋めていると考えられる。

続いて、「待つ」にアリが前接する例を見てみよう。

(7) a. 恋ひ恋ひて　逢ひたるものを　月しあれば　夜は隠るらむ　しましはあり待て（667）

b. 山越えて　遠津の浜の　石つつじ　我が　来るまでに　含みてあり待て（1188）

c. 春日野に　斎く三諸の　梅の花　栄えて　あり待て　帰り来るまで（4241）

「待つ」にアリが前接するケースは、「通ふ」に前接するケースと対照的な様相を見せる。

(7a-c)の「あり待つ」はすべて、いわゆる結果状態維持を表現するといえる（森山、1988; 畠山、2016）。結果状態維持は、主体変化が完遂した後に出現する状態を主体が維持することを表現する用法であり、典型的にはいわゆる姿勢変化動詞（「立つ」「隠る」など）のリ形・タリ形で観察されるものである。

次の例は、上代における姿勢変化動詞におけるリ形・タリ形の結果状態維持の例である[1]。

(8) a. 沖つ波　来寄する荒磯を　しきたへの　枕とまきて　寝せる君かも（222）

b. 松浦川　川の瀬光り　鮎釣ると　立たせる妹が　裳の袖濡れぬ（855）

c. 天の原　行きて射てむと　白真弓　引きて隠れる　月人をとこ（2051）

これらの例は、すべて何らかの主体変化が発生した後に出現する結果状態を、主体が意図的に維持している状況を描写していると考えられ、結果状態維持用法と分類できる。たとえば、(8a)は、「君」が「横になっている状態」を維持しているという状況が描写されており、「横になる」という主体変化結果状態の主体的維持がリ形によって表現されていると言える。

上述の結果状態時用法を(7)に提示した例に見られる接辞的アリは表現している。すなわち、(7)における「あり待つ」はすべて、「待つ」という静止状態を維持することが表現されており、これは、次例における「待てリ」と全同である。

(9) 眉根掻き　鼻ひ紐解ける　待てりやも　いつか

も見むと　恋ひ来し我を（2808）

ただし、「待てリ」は万葉集の中で2例のみしか観察されず、「あり待てり」が優勢である。

ここまでの議論から、結果状態維持用法は、接頭辞的アリとリ形が共通して持つ用法といえるものの、「待つ」という動詞に関しては、「あり待つ」が優勢という状況が観察できた。

最後に、「あり立つ」について考えてみよう。以下は、「あり立つ」とい形式の万葉集における全例（2例）である。

(10)　a.　やすみしし　わご大君　高照らす　日の皇子荒たへの　藤井が原に　大御門　始めたまひて　埴安の　堤の上に　あり立たし　見したまへば　大和の　青香具山は　日の経の　大き御門に　春山と　しみさび立てり　畝傍の　この瑞山は大き御門に　瑞山と　山さびいます（52）

b.　近江の海　泊まり八十あり　八十島の島の崎々　あり立てる　花橘を　上枝にもち引き掛け（3239）

(10a)の「あり立つ」は、「あり通ふ」における接頭辞的アリと同様に多回性・反復相を表現しており、「いつも・しばしばお立ちになっている」と解釈されるのが一般的である（内田1979）。一方、(10b)は、接頭辞的アリが「立つ」のリ形「立てル」についたもので接頭辞的アリは反復相（岬ごとに「立てリ」が成立している）を表現しているとみなされている（Whitman 2010）。

「立つ」は、姿勢変化動詞であり接頭辞的アリが接続し、「あり待つ」と同様に結果状態維持の解釈が得られると考えるのが自然と思われるが、実例は、この予想を裏切っている。しかし、2例という少数例であるため、この状況がいかなる理由で発生したかを判断することは難しく、現段階では単なる事実の指摘にとどめておきたい。

3　まとめ

本研究では、接頭辞的アリとリ形を比較し次の点を明らかにした。

(11)　a.　リ形にない「習慣相・多回性」という用

法を持つ。

b. リ形が接続しない動詞にアリが独占的に接続する（相補的分布をなしているように見える）。

c. リ形と接頭辞的アリは、「結果状態維持」用法を共通して持つ。

ただし、接頭辞的アリを本動詞とみなす内田（1979）や、接頭辞的アリに関する先駆的研究である菅野（1960）の結果を充分に吟味することができおらず、また、接頭辞的アリが接続す39例をすべて検討することもできていない。また、「あり立つ」における接頭辞的アリが多回性・反復相を表現することについても説明を与えることができなかった。

これらの点については、より包括的な研究を準備中である。

註

1　なお，畠山（2017）において、結果維持用法の例として「大君は神にし座せば天雲の雷の上に廬りせるかも」を挙げているが、これは誤りである。ここに訂正したい。

参考文献

内田賢徳(1979)「「あり」を前項とする複合動詞の構成」、万葉101、15-36

金水敏(2000)「時の表現」『時・否定と取り立て』、pp.3-92、岩波書店

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』、ひつじ書房

菅野宏(1960)「古代語助詞「つつ」の周辺」、福島大学学芸学部論集11(2)、39-61

澤瀉久孝他(1967)『時代別国語辞典上代編』、三省堂

畠山真一（2016）「ショル形の文法化について」、KLS 36、109-119

畠山真一(2017)「上代語の存在型アスペクト「リ」について：覚書として」、尚絅語文6、15-22

森山卓郎（1988）『日本語術語文の研究』明治書院

Whitman, John(2010)「否定構造と歴史的変化―主要部と否定極性表現を中心に―」、『否定と言語理論』、pp.141-169、開拓社